

第一章 雨夜の品定めのお話

[第一段 長雨の時節]

光源氏(ひかるげんじ)、名のみ(その名こそ)ことごとし(事々しゅう、賑々しいが)、言ひ消たれたまふ(苦言に光も消されるような)咎(とが、あやまち)多かなるに(多いというものを)、いとど(ここまで露わに)、かかる(このような)好きごとどもを(色恋沙汰を)、末の世にも聞き伝へて(後世にまで言い伝えて)、軽びたる名(浮き名)をや(ばかりを)流さむと(流そうとは、呆れた物ですが、それにしても)、忍びたまひける(人目忍んだ)隠ろへごと(かくろえごと、秘め事)をさへ(を殊に好んで)、語り伝へけむ(語り継いできた)人のもの言ひ(噂話の)*さがなさよ(性質の悪さ、始末の悪い事)。さるは(それでも)、いと(本当に)いたく(相当)世を憚り(世間に遠慮して)、まめだち(真面目に)たまひけるほど(していた頃は)、なよびかに(気怖じして)をかきしことは(取り立てて面白い話も)なくて、交野少将(かたののしょうしょう、昔話の好色人物)には笑はれたまひ(笑われてしまう)けむかし(事だったでしょうに)。 *「性質の悪さ」は噂話に興ずる宮廷女房達を言い、其の語りで成り立っている本物語自体と読者を揶揄する形で、やむことない源氏を庇うような表現にも見える。しかし敢て、こういう言い方で源氏の悪行を仄めかして、聞き手の興味を唆るのは講釈師の常套手段か。

源氏がまだ中将(ちゅうじょう、近衛府司令官)などにもものし(ほどの地位に)給ひし時は、内裏にのみ侍い良う(さぶらひよう、入り浸り)したまひて、大殿(おおいどの、岳父左大臣家、姫君の正妻が居る)には絶え絶え(途切れ途切れに)退出給ふ(まかでたまう、通って御出ででした)。忍ぶの乱れやと(浮気の所為かと)、疑ひ聞こゆることもありしかど(疑われた事もあったが)、さしも(そういつも)あだめき(徒めき、浮ついた)目馴れたる(見慣れた、ありふれた)うちつけの(場当たりの)好き好きしさ(すきずきしさ、色好み)などは(には)好ましからぬ(執心しない)御本性(ごほんじょう、性根)にて(なのですが)、まれには(時には)、あながちに(無理強いして)引き違へ(ひきたがえ、道ならぬ恋に)心尽くしなる(こころづくしなる、胸を痛めるといふ)ことを(ことに)、御心に思しとどむる(執心する)癖なむ(性根というものが)、あやにくにて(生憎とあって)、さるまじき(あるまじき)御振る舞ひも(御行状も)うち混じりける(中には御座いました)。

[第二段 宮中の宿直所、光る源氏と頭中将]

長雨晴れ間なきころ(夏の五月雨の頃)、内裏の御物忌(おんものいみ、清め祓いで部屋に籠もる謹慎日)さし続き(数日続いて)、いとど長居さぶらひたまふを(源氏の君が大分長く御所住まいを続けられたのを)、大殿(おおいどの、姫嫁が帰りを待つ左大臣家)には覚束無く(おぼつかなく、釈然とせず)恨めしく思したれど(思いながらも、婿たる源氏を後見する立場上)、よろづの(万事求めに応じて)御よそひ(装束から)何くれと(小物まで)めづらしきさまに(新しく立派に)調じ出で(ちょうじいで、詭えて)たまひつつ(差し上げては)、御息子の君たち(おんむすこのきんだち、左大臣家の子息で其々の地位にある方々が)ただ(公務を差し置いてでも)この御宿直所(おんとのいどころ、御所での源氏の部屋たる淑景舎桐壺)の宮仕へ(への品々の運び込み)を勤めたまふ(を御勤めに為りました)。

宮腹の中将(みやばらのちゅうじょう、妻の母宮の同腹なる義兄)は、なかに(その中でも特に)親しく馴れきこえたまひて(馴染んでおられて)、遊び戯れ(たわぶれ)をも人よりは(誰よりも)心安く、なれなれしく振る舞ひたり。右の大臣(みぎのおとど、舅)の労はり(いたわり、気遣って)かしづきたまふ(御世話なさる)住み処(嫁の家)は、この君(義兄)もいと(相当)もの憂く(ものうく、疎ましく)して、好きがましき(色好みの)あだ人(浮気者)なり。

里にても(義兄は実家の左大臣家でも)、わが方(わがかた、自分の部屋)の設い(しつらひ、装飾)まばゆくして(華やかにして)、君の出で入りしたまふに打ち連れ(うちつれ、連れ立ち)きこえたまひつつ(申し上げては)、夜昼、学問をも遊びをも両共に(もろともに)して、をさをさ(長々、概ね)立ちおくれず(引けを取らず)、いづくにても(何処にでも)まつはれ(纏い、御伴)きこえたまふほどに(申し上げていたので)、おのづから(自ら、次第に)畏まり(かしこまり、格式張った敬い立て)も得(え、とくに)おかず(置かず、しなくなり)、心のうちに思ふことをも隠しあへずなむ(隠し切れなくなるほどの)、睦れ(むつれ、親密ぶりで)きこえたまひける(御座いました)。

つれづれと降り暮らして(一日中降り続き止まぬ)、しめやかなる宵の雨に(しっとり落ち着いた夜の雨に)、殿上にも(てんじょう、内裏表にも)をさをさ(概ね)人少なに(人影疎らで)、御宿直所(奥の淑景舎)も例よりは(れいよりは、普段よりは)のどやかなる心地するに、大殿油(おおとなぶら、灯火)近くて(ちかくて、近づけて)書ども(ふみども、漢文書籍類)など見たまふ(御二人は見て御出ででした)。近き御厨子(みずし、置き棚)なる(にある)色々の(其々色違いの)紙なる文ども(ふみども、恋文)を引き出でて、中将わりなく(割り無く、無闇に)ゆかしがれば(愉可し掛れば、見たがったが)、

「さりぬべき(差し障りの無いものを)、すこしは見せむ(少しは見せます)。かたは(片端、極まりが悪く)なるべきも(なってしまうものも)こそ(ありますので)」

と、許したまはねば(源氏の君は許されなかったので)、

「その(いや、その)うちとけて(心の内を晒して)かたはらいたしと(みっともない)と思されむ(思っておられるもの)こそ愉可し経れ(ゆかしけれ、面白そう)。おしなべたる(型通りの)おほかたのは(普通の恋文なら)、数ならねど(私などは物の数ではないが)、程々につけて(それなりに)、書き交はしつつも(遣り取りもして)見はべりなむ(見知っております)。おのがじし(己自身、各々自分が感じた)、恨めしき折々(恨み言とか)、待ち顔ならむ夕暮れ(夜の忍びを待つ夕暮れの女の気持ち)などのこそ(などを書いて寄越した文こそ)、見所は在らめ(あらめ、在るに違いない、在るだろう)」

と怨(えん)ずれば(と中將が厭味を返すが)、やむごとなく(高貴な方からの)せちに(切実に)隠したまふべきなどは(隠しなさるべきものなどは)、かやうに(このように)おほごうなる(大雑で不用心な)御厨子などに打ち置き(置き放しで)散らしたまふべくも(散らかして置きなさるはずも)あらず、深く(大事に)とり置きたまふ(仕舞ってある)べかめれば(はずだから)、この御厨子にあるものは二の町の(二流の)心安き(気楽なもの)なるべし(に違いない)。片端づつ見るに(中將は少しづつ見ては)、「かく(こんなにも)さまざまなる物どもこそ(色々な物が)侍りけれ(は

べりけれ、在るのですね)」とて(と云って)、心あてに(当て推量で)「それか、かれか(これは其の人か彼の人か)」など問ふなかに、言ひ当つるもあり、もて離れたることをも(見当違いのものさえ)思ひ寄せて疑ふも(勝手に勘繰っては)、をかしと思せど(面白がっていたが)、言少なにて(ことずくなにて、源氏はそれらの恋文を言葉少なく)とかく紛らはしつつ(何かと誤魔化しながら)、とり隠し給ひつ(取り返して隠してしまわれた)。

「そこにこそ(其処にこそ、そちらこそ)多く(の恋文を)集へ(つどえ、集めて)給ふらめ(いるんでしょう)。すこし見ばや(みばや、見たいですね)。さてなむ(そうしたら)、この厨子(棚、の手紙も)も心よく開くべき(開けますから、見せますから)」とのたまへば(と君が云われると)、

「御覧じ所(見るに値する所の)あらむこそ(あるものなど)、難くはべらめ(殆ど在りますまい)」など聞こえ給ふ序でに(などと中将は御応え申し為さり、続けて)、

「女の、これはしもと(これならばと)難つく(なんつく、難点の)まじきは(無い者などは)、難くもあるかなと(得難いものだと)、やうやうなむ(漸くにして)見たまへ知る(分かりました)。ただ上辺ばかりの(うはべばかりの、見せ掛けの)情けに(風情で)、手走り書き(手紙を走り書きしたり)、折節の答へ(をりふしのいらえ、季節毎の挨拶に気の利いた返事を)心得て(いて)、うちし(それでよし)などばかりは(ということだけの人なら)、随分に(分相応に、それなりに)よろしきも(良く見える人も)多かりと見たまふれど、そも(それも)まことにその方を(本当に風情の趣き有る方として)取り出でむ選びに(とりいでんえらびに、選び出そうという時に)かならず漏るまじきは(もるまじき、漏れないでいようというのは)、いと(かなり)難しや(かたしや、難しい)ところでしょうよ)。わが心得たることばかりを(自分の考えだけで)、おのがじし(それぞれ勝手に)心をやりて(自己満足して)、人をば(罵、他の女を殊更)落としめなど(悪く言うような)、かたはらいたき(見苦しき)こと多かり。

親など立ち添ひ(親などが何時も側に付いて)持て上がめて(褒め上げて)、生ひ先籠れる(おいさきこもれる、生まれてからずっと家に籠もっている)窓の内なるほどは(箱入り娘などは)、ただ片かどを聞き伝へて(その芸事の片鱗を耳にただけで)、心を動かすこともあめり(興味を持つ男も居るかもしれせん)。容貌をかしく(かたちをかしく、顔立ちが良くて)うちおほどき(当たりが柔らかで)、若やかにて(若く華やかで)紛るることなきほど(雑用に追われる事も無い内は)、はかなき(手慰みの)すさび(習い事)をも(でも)、人まねに(見よう見まねで)心を入る(打ち込んで励む)こともあるに(こともあるので)、おのづから(そうすれば)一つ(一つくらいは)故付けて(ゆゑづけて、芸事を身につけて)為出づる(しいずる、それらしく見せる)こともあり(こともあります)。

見る人(世話する仲人は)、後れたる方(欠点)をば言ひ隠し、さてありぬべき方(隠さなくても良いであろうという点)をば繕ひて(ばかりを言い飾って)、まねび出だすに(語り伝えるが)、『それ(その点は)、然か非じ(しかあらず、それ程ではないでしょう)』と、空に如何は(そらにいかかは、見ていないので如何とも)推し量り思ひ下さむ(おしはかりおもいくたさん、想像で断定できない)。まことかと(話を信じて)見もてゆくに(会って行く内に)、見劣りせぬやうは(見劣りしないようなのは)、なくなむあるべき(居なくなってしまうものです)」

と(と一気に話して)、呻きたる気色も(うめきたるけしきも、大きく息を吐いた中将のそぶりまでもが)恥づかしげなれば(君が引け目を覚えるほど大人びていたので)、いとなべてはあらねど(その話の全てにでは無いだろうが)、われ思し合はすることやあらむ(どこか思い当たることでもあったのでしょうか)、うち(ふと)ほほ笑みて、

「その(今のその)、片かどもなき人は(芸事の片鱗すらない人は)、あらむや(いるものでしょうか)」とのたまへば(と述べ給えば)、

「いと(いやこれは)、さばかりならむ(それすらないという)辺り(あたり)には、誰れかは(誰が)賺され(すかさされ、騙されて)寄り(はべらむ(近づくものですか)。取るかたなく(取り柄の無い)口惜しき際(くちをしききわ、最下層)と、優なりと(いうなりと、とても優れていると)おぼゆばかり(思われるくらいの)すぐれたる(選れたる、最上層)とは、数等しくこそ(同じくらいの少数が)はべらめ(居るのでしょうか)。人の品高く(しなたく、上流の家に)生まれぬれば(生まれたなら)、人にもて傳かれて(親から大事にされて)、隠ること(人目から隠れていること)多く、自然(じねん)にその気配(けはひ)こよなかる(特別なものになる)べし(でしょう)。中の品(中流の人)になむ(にこそ)、人の心々(こころごころ、其々の気持ち)、おのがじしの(各々自身で)立てたる(作り上げた)おもむき(個性)も見えて、分かるべきこと(一人一人の違いが)かたがた(方々)多かるべき(多くあるでしょう)。下(しも)のきざみといふ際(下流の身分の人)になれば(ということになると)、ことに(特には)耳たたずかし(興味が持てません)」

とて、いと(まるで)隈無気なる気色(くまなげなるけしき、知らぬ事の無きそうな見識者ぶりを)なるも(中将がしているのが)、ゆかしくて(君は愉快になって)、

「その品々や(その身分の違いとは)、いかに(どう考えたものか)。いづれを三つの品に置きてか分くべき。元の品高く生まれながら(上流に生まれながら)、身は沈み(不遇に沈み)、位みじかくて(くらみみじかくて、薄給で)人げなき(人並み以下で暮らす女もあり)。また直人(なおびと、並みの家柄、中流出で)の上達部(かんだちめ、高官)などまでなり上り、我は顔(われはかお、我が物顔)にて家の内を飾り、人に劣らじと思へる(家の娘もある)。その卦占め(けぢめ、区別)をば、いかが分くべき」

と問ひたまふほどに(とお尋ねになっている所に)、左馬頭(ひだりのうまのかみ、近侍武官の厩舎長官)、藤式部丞(とうしきぶのじょう、藤原姓の近侍文官)、御物忌に籠もらむとて参れり。両名は世の(評判の)好き者にて物よく(何事にも)言ひ通れる(いいとほれる、弁の立つ)を、中将待ち取りて(この両名を待ち受けて)、この品々を弁え(わきまへ、区切る)定め(判定を)争ふ(論戦する)。いと(とても)聞きにくきこと(聞き苦しい話が)多かり(多く出ました)。

[第三段 左馬頭、藤式部丞ら女性談義に加わる]

「なり上れども(なりのぼれども、成り上がっても)、もとよりさるべき筋ならぬは、世の人の思へることも、さは言へど、なほことなり(やはり上流とは違う)。また、元はやむごとなき筋なれど、世に経る手続き(よにふるたづき、世渡りの手立て)少なく、時世に移ろひて(ときよにうつろいて、時勢に押されて)、おぼえ衰へぬれば(出世できなければ)、心は心としてこと足らず(思

うようには金が使えず)、悪ろびたることども(体裁の悪いことも)出でくるわざなめれば(出てくる様になりますから)、とりどりにことわりて(どちらもそれぞれの理由で)、中の品にぞ置くべき(中流と考えて置くべきです)。

*受領(ずりょう)と言ひて、人の国のことに(任された一つの国に)かかづらひ営みて(掛かりきりで管理して)、品定まりたる中にも(地位を得ている者の中にも)、また階々(きざみきざみ、階級)ありて、中の品の異しうは非ぬ(けしゅうはあらぬ、中流に見劣りしない者を)、選り出でつべき(えりいでつべき、選り出して良い)頃ほひ(ころおい、頃合、昨今の時勢)なり。 *この場面で、中央政府の最高権力者である大臣家の有望株と目される中將が語る「受領」についての内容は、当時の世情が垣間見えて非常に興味深い。「受領」は現地で実権を持つ国司をいう。「国司」は地方長官だが、平城京での直轄管理から平安京での委任管理へと移行する中で、現地実務者は国庫へ一定の租税を納めた後は、私的蓄財が可能となっていたという。朝廷が政府から王宮へ変容して行く実体を見るようだ。荘園制で中央の権威は上がるが実権は下がるという、この背反事態を中將は無批判に歓迎しているようにも見えるが、それは恐らく、基本的に一定の技術蓄積の上に、主に農業での生産性向上で増産に沸くという、その時代の高揚感を反映したものだろうと思える。

生々の上達部(なまなまのかんだちめ、それと中央上層部になりたての家柄)よりも非参議の四位(ひさんぎのしい、政務に与らない事務長官くらいの家柄)どもの、世のおぼえ口惜しからず(地位も程ほどで)、もとの根ざし卑しからぬ(元の生まれが良家の)、やすらかに身をもてなし(穏やかな物腰で)ふるまひたる(暮らす娘の姿が)、いと(とても)かはらか(快活)なりや(なんですよ)。

家の内に足らぬことなど、はた(およそ)なかめるままに(無いだらうという具合に)、省かず(はぶかず、質素にすることもなく)まばゆきまで(眩しいほど贅沢な)もて(暮らしぶりで)かしづける(大事に可愛がられた)女などの、おとしめがたく(気位高く)生ひ出づるも(育った者も)あまた(数多く)あるべし(あるでしょう)。官仕へに出で立ちて(官仕えを始めて)、思ひかけぬ幸ひとり出づる例ども(さいはひとりいづるためしども、思わぬ玉の輿に乗る例なども)多かりかし(多いではないですか)」など言へば(などと中將が先の君の問い掛けに答えると)、

「すべて(全ては)、賑ははしきに(にぎわわしき、富の力に)抛るべきな(よるべきな、抛るといふべきもの)なり(という訳だ)」とて(それを受けた源氏の君が中將の話があっさり纏めて、簡単な一般論だったように言いながら)、笑ひたまふを、

「異人の(ことひとの、まるで他人事とでも)言はむように(言う様な)、心得ず(意外な)仰せらる(仰り様ですね)」と、中將憎む(中將は君の母御たる故桐壺御方を思わせ振りに話して、君の心中を探ろうとした思惑を軽く去なされて、反感して嫌味を言う)。

「元の品(もとのしな、元々の家柄)、時世の覚え(ときよのおぼえ、現在の評判)うち合ひ(揃って良い)、やむごとなき(高貴な)あたりの(所の女たちが)内々の(家の中での)もてなし(物腰や)けはひ(装いが)後れたらむは(劣っているようなのは)、さらにも言はず(言うまでもなく)、何をして(如何した訳で)かく生ひ出でけむと(そう育ってしまったのかと)、言ふかひなく(残念に)おぼゆべし(思うばかりです)。うち合ひて(また家柄も地位もあって)すぐれたらむも(優れているというの)はことわり(言割り、理に適っていて)、これこそは然る可き事と(さるべきことと、

当たり前(の事)とおぼえて(思われて)、めづらかなること(珍しい)と心も驚くまじ(驚くことも無いでしょう)。なにがしが(私如きが)及ぶべきほど(適う身分)ならねば(ではないので)、*上が上は(かみがかみは、御所の内向きは)うちおきはべりぬ(差し控える事に致しましょう)。*「上が上」について、訳文は「上の品の上<上流の其の上>」としてある。専門家に技術的な語法などで挑む心算は持ち得ないが、感性に逃げて反論する。此処の場面の舞台は後宮最奥の淑景舎(しげいさ)である。斯かる場所に於いては、「かみ」という音は<神>に通じて<帝>を意味し、「上が上」とは<帝の妃>のことであり、恐らくは読みも「かみがうへ」ではなかろうか、とまで言って置く。そして、その「かみ」は成句か贅辞でもない限り、本来は「品(しな)」についての高低などという俗論には使用出来ない、と思う。それを此処では日常会話として親しげに使っている。この場で斯かる言い方が許されるのは、御子たる光源氏と左大臣家の総領にして蔵人の頭たる中将だけである。左馬頭や藤式部丞では恐れ多くて、そもそも帝に及ぶ言葉を口には出来ない、だろう。それに、此処の弁は「やむごとなき」階層の女についての語りで、左大臣家のみならず嬪として右大臣家の内情にも明るい中将が「内々の」と内輪の愚痴話をしている内容だと考えれば、下の文の次級の女に興味を持つ話が自然な流れで出てくる。そして中将は、こうして自分が本音を吐露しているにも関わらず、君がそうして白ばっくれて何も言わないのは気に入らないが、直接に帝の血を引く君には帝の甥に過ぎない自分では文句は言えない、と嫌味を言った、と私は読む。故に、この発言は頭中将によるものであり、左馬頭のものではない、と決め付ける。その方が、前後の文脈も通る。当然に以下の文も中将の弁。【2010.3.17.記。当ノートは蓬生巻を読む際に、末摘花巻を読み直す必要に迫られ、またその際に本巻の内容を確認する必要に迫られ、読み返して付記した。本件は初読の際に、渋谷教授の訳注に従って左馬頭の弁として仮訳していた置いた懸案であり、此処に一応の決着を付けたが、以下の解釈に影響する判断なので新たな注意項目が増えた、ことにもなる。】

さて、世にありと人に知られず、さびしく荒れたらむ(あばれたらん、荒れ果てた)葎の門に(むぐらのかどに、雑草茂る門の家に)、思ひの外に労甚気(らうたげ、庇いたくなる程の可憐な様子)ならむ人の閉ぢられたらむ(世間を避けてひっそり暮らす姿)こそ、限りなくめづらしくは思えめ(おぼえめ、思えるものです)。いかで(どうして)、はた(また)かかり(このような行き掛かりに)けむと(なったのかと)、思ふより違へることなむ(思いの外の事なので)、あやしく(妙に)心とまる(心に残る)わざなる(ものです)。

父の年老い、物難し気に(ものむつかしげに、見苦しく)太りすぎ、兄(せうと)の顔憎げに(かほにくげに、渋い顔で)思ひやり(考え込んでいて)、異なる事なき(華やぎのない)閨の内に(ねやのうちに、家の奥に)、いといたく(とても強く)思ひあがり(気位を持って)、はかなく(ほんの少し)為出でたる(しいでたる、して見せた)ことわざも(事業も、芸事も)、ゆゑな(味わいが無い)からず(でも無いと)見えたらむ(思えるほどの女は)、片かどにても(諸芸の所作の真似事など、一つの取り柄に過ぎないが)、いかが(どうして)思ひの外にをかしからざらむ(存外に興味深く無いなどと言えましようか、いや実に興味深い)。

すぐれて疵なき方の(正妻として全く欠点の無い方を)選びにこそ(選ぶという事では)及ばざらめ(及ばない所でしょうが)、さる方にて(今言った様な興味深い女として)捨てがたきもの(思い当たる者)をは(と言えば)」

とて(と中将が問いかけるように)、式部を見やれば、わが妹どもの宜しき聞こえ(よろしききこえ、上々の評判)あるを思ひて述給ふにや(のたまうにや、中将が今の話題を取り上げ為さって自分に水を向けたのか)、とや心得らむ(とでも思ったのか)、ものも言はず(何も言わなかった)。

「いでや(出でるにや、いるのだろうか、そんな魅力的な女が)、*上の品と思ふに(かみのしなとおもうに、上流と思う人の中に)だに(でさえ)難げなる(かたげなる、それほどの人は得難たそうな)世を(世の中だというのに)」と、君は思すべし(きみはおぼすべし、源氏の君は御思いになったようだ)。 *「上の品」を<上流>と言い換えても、今日での言い方としては成立する、とは思ふ。しかし「上の品」という語感から、<この後宮の妃たち>のことを君が遠回しに言って楽しんでいる、と取らないと何を「君は思すべし」か、が分からない。読み返して、源氏の念頭に藤壺宮が在った事が確認できた。【2010. 3. 18. 記】

白き御衣ども(おんぞども、内に重ね着した薄衣が)の軟よらか(なよらか、柔かい)なるに(感じで)、直衣(なほし、のうし、平服の上着)ばかりを(だけを袴も付けず)仕脱けなく(しどけなく、くつろいで)着なしたまひて(着こなされて)、紐などもうち捨てて、添ひ臥し(そいぶし、寝そべて)たまへる(いらした)御火影(おんほかげ、灯火に照る君の御姿は)、いと(大変)めでたく(美しく)、女にて(女として)見たてまつらまほし(見奉りたいほどだった)。この御ため(おんため、君の御相手)には*上が上を(かみがかみを、帝の後を)選り出でて(えりいでても)、なほ飽くまじく(猶も満たされないかと)見えたまふ(思われる)。 *「上が上」については<帝の後>と解釈する。その様に読み返してみると、「なほ飽くまじく見え」という言い方の危うさが一気に浮かんで、以前は意味不明で消化不良感の気持ち悪かった文が俄然艶めいて、その仄めかした描写から<藤壺宮を抱いて女を味わった源氏の色気にドキッとした>スリルを味わえた。と同時に、当時の聞き手なら誰でもこの面白さが分かるだろうし、現に楽しんでいた、とも知りえた。そして、敢てこの部分の誤読を意図した明治政府以来の軍部の悪意と、急速に進んだ出版技術によってもたらされた<王朝文化の民主化>への懸念、をも感じた。【2010. 3. 18. 記】

さまざまの(こうして様々な)人の上(ひとのうえ、女の話)どもを(の数々を)語り合はせつつ(比較するうちに)、左馬頭が話をまとめるように言う。

「*おほかたの世につけて見るには咎なきも(ただ気に入って通う分には特に咎める欠点がない女でも)、わがものと打ち頼むべきを選らむに(自分の正妻として信頼すべきものを選ぶとなると)、多かる中にも、えなむ(なかなか)思ひ定むまじ(決められなくなり)かりける(がちなものです)。 *注に<以下「出でばえするやうもありかし」まで、左馬頭の詞。理想的な女性は少ないことを説く。「世」は男女の仲、「見る」は男女の交りをする、結婚する、の意であるから、ここは、世間一般の男女の仲についていうのではなく、自分の身の上に、通り一遍の男と女の仲としての付き合っていくには、の意。>とある。前の文までと一変した整然とした解説振りだが、これが左馬頭の詞と断定する根拠は示されていない。多分、話の内容や言葉遣いから揺るぎ無い定説とされているのだろうが、根拠は自分で探せ、と言う事らしい。【2010. 3. 18. 記】

男の(をのこの、男が)朝廷に(おほやけに、政府に)仕うまつり(つこうまつり、出仕致し)、はかばかしき(てきぱきとした)世のかためと(施政者と)なるべきも(成る事は出来ても)、真の器もの(まことのうつはもの、本当の大物)となるべきを(と成る事が出来るものを)取り出ださむには(見つけ出そうと言う時には)、かたかるべし(難しくなる)かし(ものでしょう)。されど(更に其の)、賢し(かしこし、有能者)とても、一人二人(ひとりふたりで)世の中を政ごち(まつりごち、

纏め束ねて)しる(敷る、平らに治める)べき(事が出来る)ならねば(ものではないので)、*上は下に輔けられ(かみはしもにたすけられ)、下は上に靡きて(なびきて、従って)、こと広きに(何事にも)譲ろふらむ(ゆずらうらむ、任せあっていくものです)。 *左馬頭の弁に「かみ」が出てきたが、これは公事に関する概論であり、帝の<神性>に及ばない。【2010. 3. 18. 記】

狭き家の内の主人(せばきいへのうちのあるじ、方や私事の家事を取り仕切る正妻)とすべき人(ひと、女)一人を(ひとりを、一人を選び出そうと)思ひめぐらすに、足らはで悪しかるべき大事どもなむ、かたがた多かる。とあればかかり(そうと思えばこうだったり)、あふさきるさ(逢瀬来る瀬、の行き違い)にて、なのめに(並々めに、月並みに)さても(然ても、だけでも)ありぬべき(遣り遂せる)人の少なきを、好き好きしき心の(浮気心の)すさびにて(進びにて、趣くまに)、人のありさまをあまた見合はせむの(みあはせん、見比べようとの)好みならねど(このみならねど、好奇心ではないが)、ひとへに(偏に)思ひ定むべき寄る辺と(よるべと、目安に)すばかりに(しようと思う一心で)、同じくは(どうせ同じ事なら)、わが力入りをし(ちからいりをし、自ら努力して)直し(なほし、女を仕込み直して)ひきつくるふべき(体裁を繕って回るような)所なく(面倒無しに済むような)、心に適ふ(こころにかなふ、理想どおりの)やうにも(ようなものまで)やと(いないかと)、選り初め(えりそめ、選り好みを初め)つる人の(出した人は)、定まりがたきなるべし(とても選び出す事など出来ないものです)。

かならずしも我が思ふに適はねど(必ずしも理想通りの女ではないが)、見初めつる(初めて夫婦となった)契りばかりを(縁だけを)捨てがたく思ひ留まる(とまる、続ける)人は(ひとは、男は)、もの(およそ)まめやかなり(誠実)と見え(と世間から思われ)、さて(そうして)、保たるる(関係が長く続いている相手の)女のためも(女の身にとっても)、心にくく(うらやましく)推し量らるるなり(世間から思われるところです)。

されど、何か(しかし、何ですnee)、世のありさまを見たまへ(世間の夫婦の有様を拝見し)集むるままに(多くを集めて考えても)、心に及ばず(思い掛けずに)いと(これはとても)ゆかしきことも(良い夫婦だと思ったことなども)なしや(ありません)。

*君達(きんだち)の*上なき(かみなき、最上級の)御選びには(おんえらび、妃選びということになると)、まして、いかばかりの人かは(どれほどの人なら)足らひ給はむ(たらひたまわん、適いますやら)。 *「君達」は「公達」で、一般に公達は公家の子息だが、何と此の場には帝の御子と其の義兄という最高位の者が同席しているので、此处では彼らに対して直接「きみたち」と呼び掛けた事になる。それに此の場自体が後宮の淑景舎桐壺なのである。やはり「源氏物語」は、どうにもブツ飛んだ設定になっている。というより、当時の厳然たる身分社会にあって、テレビはおろか写真一枚さえなく、せいぜい絵物語で好奇をそそる感覚には、宮廷人がどんなに後宮の話をしてみても、どうせ関係者以外には分からない事と思っていたのかも知れない。まして今日、私のような下の者が何をかいわんや、と言う所か。だがしかし、それでも作者や先人らが何か深遠な思惑を持って此の物語を綴って来た様な仄めかしも窺える気がして、やはり臆ろ気な疑問も捨てきれない。 *左馬頭が此处で「かみ」と言えたのは、正に「君達」が同席していて、彼等に対する言葉であったから、だと思ふ。それでも尚、この場で「かみ」を発音することに、<憚り>とそれ故の<戯れ>を感じるのは思い過ぎだろうか。それと、この発言から話者が「君達」でない事は裏付けられた。【2010. 3. 18. 記。なお、前項のノートは以前に書いたもので「臆ろ気な疑問」が、我ながら今はどの辺の事なのか、色々ある気がするので、当時何を想定していたか良く分からず、当時

でも良く分からないから「朧ろ気」だったのかも知れないが、「仄めかし」とあるから、源氏の「御火影」の描写に対する消化不良感を訴えているのかも知れない。だとしたら、今は消化不良は幾分改善したかも知れない。にも関わらず、作者の思惑に対する「朧ろ気な疑問」は依然として在り続けるし、仮に幾つかの又は幾つもの答えを見つけたとしても、解消する類いの問題では無いだろうと、改めて思う。】

容貌きたなげなく(見た目卑しくなく)、若やかなるほどの(若々しい年頃の)、おのがじしは(自らは)塵もつかじと(ちりもつけまいと)身をもてなし(身だしなみして)、文を書けど(手紙を書けば)、おほどかに(大まかで卒のない)言選り(ことえり、言葉選び)をし、墨つき(墨色)ほのかに(淡く)心もとなく(頼り無さ気に)思はせつつ(思わせ続け)、また(次に)然やかにも(実際に)見てしがなと(会いたいと)すべなく(思わせぶりに)待たせ、わづかなる(会えば会ったで、少しでも)声聞くばかり(声が聞ければと)言ひ寄れど(言い寄っても)、息の下にひき入れ(声を潜めて)言少な(ことずくな、言葉少なに)なるが(していることが)、いと(とても)よく(良く)もて隠す(欠点を隠す)なりけり(ものです)。なよびかに(なまめかしく)女し(をんなし、女らしい)と見れば(みえるものは)、あまり(度過ぎた)情けに(情事に)引き込められて(耽りがちで)、とりなせば(興じても)、あだめく(虚しい)。これを初めの(はじめの、第一の)難とすべし(正妻にあるまじき難点というべきでしょう)。

事が中に(家事の中では)、なのめ(並目、並を然りで疎かにする)なるまじき(事があってはならない)人の(主人の)後見の方(うしろみのかた、世話役として)は、もののあはれ(風流に)知り過ぐし(傾き過ぎて)、はかなきついで(ちょっとした事にでも)情けあり(勿体ぶって)、をかしきに(作法に則った)進める方なくても(遣り方をしなくても)よかるべしと見えたるに(良いだろうにと見受けませんが)、

また(また逆に)、まめまめしき筋を立てて(実直一点張りで)耳はさみがちに(髪を耳挟みにして)美さうなき(びそうなき、化粧をしない)家刀自(いえとうじ、主婦)の、ひとへに(ただただ)うちとけたる(恥じらいも忘れて)後見(うしろみ、世話焼き)ばかりをして、

朝夕の出で入りにつけても(出勤時にはこの日に起こりそうな事や、帰宅時にはこの日に起こった事などについて)、公私(おほやけわたくし)の人の佇まひ(ひとのたたずまひ、他人の振る舞い)、善き悪しきことの、目にも耳にもとまるありさまを、疎き人に(うときひとに、その辺の事情を良く知らない女に)、わざと(わざわざ)打ち学ばむ(うちまねばむ、じっくり語り聞かせる)やは(ものでしょうか)、

近くて(近くにいて)見む(当然に事情を知っている)人の(妻が)聞きわき(話を聞き分けて)思ひ知るべからむに(理解出来るだろうから)語りも合はせばやと(語り合おうかと思ひ)、うちも(思わず)笑まれ(笑えたり)、涙もさしぐみ(涙ぐんだり)、もしは(もしくは)、あやなき(筋違いに)おほやけ腹立たしく(義憤を覚え)、心ひとつに思ひあまること(自分ひとりの胸の内に収めきれない事)など多かるを、何にかは聞かせむ(こうも世話如くでは聞く耳持たずに見えて、一体自分は誰に話して聞かせようと言うのか)と思へば(という気になって)、うちそむかれて(つい顔を背けてしまって)、人知れぬ思ひ出で笑ひもせられ(人知れず思い出し笑いが込み上げて来て)、『あはれ(アーア)』とも、うち独りごたるるに(独り言を洩らしたりすると)、『何ごとぞ』など、

あはつかに(慌て気味に)さし仰ぎみたらむは(呆然と顔色を伺うような妻のありさまは)、いかがは(何とも)口惜しからぬ(残念なものです)。

ただ一向に(ひたふるに)子めきて(子供めいて)柔らかならむ人を(従順な女を)、とかく(あれとれと)ひきつくろひては(仕込み直したうえは)などか見ざらむ(どうして妻にせずには居られましようか)。心もとなくとも(拙さも)、直し所ある(直し甲斐があると)心地すべし(思えるものです)。げに(実に、確かに)、さし向ひて見むほどは(一緒に暮らして居るときは)、さても(その)らうたき方に(かわらしさに)罪ゆるし(至らなさを許し)見るべきを(庇ってられるが)、立ち離れて(たちはなれて、離れて暮らすようになって)然る可き事をも(さるべきことをも、必要な用事などを)言ひやり(言い渡した時や)、をりふしに(時節に沿って)し出でむわざの(行う祝い行事での)あだ事にも(芸事にも)まめ事にも(仕事にも)、わが心と(自分では)思ひ得ることなく(おもいうることなく、判断が出来ず)深きいたり(深い配慮が)なからむは(行き届かないのは)、いと(甚だ)口惜しく(残念で)頼もしげなき(頼りないという)咎や(難点なのだから)、なほ(やはり)苦しからむ(困ったものです)。

常は(普段は)すこし稜々しく(そばそばしく、とげとげしく)心づきなき(愛想も無い)人の(女が)、をりふしにつけて(季節柄の行事儀式で)出でばえ(優れた出き映えを)するやうも(見せたりする事も)ありかし(あるものです)」

など、隈無き物言ひ(くまなきものいひ、詳しい話し振り)も(をした左馬頭も)、定めかねて(結論を出しかねて)いたく(大きく)うち嘆く(溜息をつく)。

[第四段 女性論、左馬頭の結論]

「今は、ただ、品にもよらじ(家柄では選ばない)。容貌をば(かたちをば、見た目など)さらにも言はじ(さらに問わない)。いと(ひどく)口惜しく(つまらない)拗けがましき(ねぢけがましき、ひねくれた)おぼえだに(印象でさえ)なくは(なければ)、ただ偏に(ひとへに、何よりも)ものまめやかに(実直で)、静かなる心の趣ならむ(おもむきならむ、風情漂う)よるべをぞ(抛り所をこそ)、つひの頼み所には(生涯の伴侶には)思ひおく(考えておく)べかりける(べきなのでしょう)。あまりの(その上に)ゆゑ(故、教養)よし(由、芸事)心ばせ(気立て)うち添へたらむをば(揃って備えた女であったのなら)、よろこびに思ひ、すこし後れたる方(劣った所の)あらむをも(ある女でも)、あながちに(強いて)求め加へじ(高望みはしない)。うしろやすく(先行きが安心で)のどけき所だに(温厚な点さえ)強くは(確かなら)、うはべの(見かけの)情けは(情緒は)、おのづから(自然に)もてつけつ(身に付いて来る)べき(可き)わざをや(ものなのですから)。

艶に(えんに、上品ぶって)もの恥ぢして(恥ずかしげに、遠慮がちにしている女が)、恨み言ふべきことをも見知らぬ様に(さまに、かのように)忍びて(耐えて)、上は(うえは、うわべは)つれなく(平素のように)みさをつくり(変わらぬ様子でいても)、心一つに(胸いっぱい)思ひあまる時は、言はむかたなく(途方も無く)すごき(恐ろしい)言の葉、あはれなる(悲しい)歌を詠みおき、しのばるべき(偲ばれるべき)形見を留めて(とどめて、残して)、深き山里、世離れたる(よばな

れたる、辺鄙な)海づら(海辺)などに這ひ隠れぬる(はひかくれぬる、隠れ込んでしまう)をり(折、そんな時ですが、そう云えば)。

童にはべりし時(自分が子供だった時に)、女房などの物語読みしを聞きて(女中などが物語を読んでくれたが、それを聞いて)、いとあはれに悲しく(とても可哀相に思って悲しみ)、心深きことかなと(その思いの深さを推し量って)、涙をさへなむ落としはべりし(涙さえ落としましたが)。今思ふには(今思えば)、いと軽々しく(そんな話は先ず軽薄で)、殊更びたる(ことさらびたる、わざとらしい)ことなり(ものなのですが)。

心ざし深からむ男をおきて(情け深い夫を残して)、見る目の前につらきことありとも(夫の浮気を知ったからといって)、人の心を見知らぬやうに逃げ隠れて(夫の気持ちに分からないと云って姿を隠し)、人をまどはし(困惑させて)、心を見むとするほどに(本心を確かめようとしている内に)、長き世の(一生の)もの思ひになる(後悔となるというのは)、いと(全く)あぢきなき(感尽き無き、つまらない)ことなり(ことです)。

『心深しや(なんて奥床しい)』など、ほめたてられて、あはれ進みぬれば(思い昂じれば)、やがて尼に為りぬ(なりぬ、なってしまう)かし(ものなのでしょうか)。思ひ立つほどは(尼になろうと思ひ立った時は)、いと心澄めるやうにて(すっかり悟って)、世に返り見すべくも思へらず(俗世に未練など無いと思って)。『いで、あな悲し(やだ、ああ何で)。かくはた思しなりにけるよ(此処まで思ひ詰めていたなんて)』などやうに、あひ知れる人来(ひとき、知り合いが来て)とぶらひ(訪い、見舞ったり)、ひたすらに憂しとも(ただ憎いばかりとも)思ひ離れぬ男(思い切れていない夫が)、聞きつけて涙落とせば、使ふ人(つこうひと、召使いや)、古御達など(ふるごたちなど、老女など)、『君の御心は、あはれなりける(情け深かった)ものを。あたら御身を(御身を出家に充たらししたのは早まって惜しい事でした)』など言ふ。みづから額髪(ひたひがみ)を搔き探りて(かきさぐりて、確かめて)、あへなく(手応え無く)心細ければ、うちひそみぬ(眉をひそめて泣き顔になってしまう)かし(のです)。忍ぶれど(堪えても)涙こぼれ初めぬれば(涙が零れ出すと)、折々ごとに(何につけても)え(とても)念じえず(修行が出来ず)、悔しきこと(くいしきこと、俗世の未練)多かめるに(多いようなので)、仏もなかなか(仏門入りの達観せずは生半可で反って)心汚なし(こころぎたなし、見苦しい)と、見たまひつべし(御覧になるだろう)。濁りにしめるほどよりも(濁世に染まる時よりも)、なま浮かびにては(半成仏では)、かへりて悪しき道にも漂ひぬ(ただよいぬ、さ迷わせる)べくぞ(事になってしまうとさえ)おぼゆる(思われます)。

絶えぬ宿世(たえぬすくせ、前世からの因縁を)浅からで(浅くは無いと考えて)、尼にもなさで(身を隠した妻を尼にさせぬように)尋ね取りたらむも(夫が探し出して止めたとしても)、やがて(結局は)その思い出で(おもひいて、思い出が)うらめしきふし(心残りになって)あらざらんや(しまうものではないでしょうか)。あしくもよくも(どんな時でも)あひ添ひて(折り合って連れ添って)、とあらむ折も(そういう時も)かからむきざみをも(また別の時でも)、見過ぐしたらむ(あまり悶着せずに見過して置く)仲こそ、契り深く(縁の深さを)あはれならめ(感じ入るもので)、我も人も(自分も相手も)、うしろめたく(一度起こしてしまった其の悶着のわだかまりは)心おかれじやは(忘れる事が出来ないのではないのでしょうか)。

また、なのめに(並目に、人並み程度に)移ろふ方(うつろうかた、移り気)あらむ人を(する夫を)恨みて(憎み憤って)、気色ばみ(けしきばみ、態度に出して)背かむ(そむかむ、別れてしまう女は)、はた(やはり)をこがましかり(痴がましかり、愚かしく見える)なむ(ものです)。心は移ろふ方ありとも(心移りがあっても)、見そめし心ざし(出会えた時の決心を)いとほしく(大事にしたい)思はば(思うなら)、さる方のよすがに(その縁を頼りに、添い遂げようと)思ひても(思っていたに)ありぬべきに(違くないのに)、さやうならむ(そのような)たちろきに(意外な成行に)、絶えぬべきわざなり(破局を迎えてしまう訳です)。

すべて、よろずのことなだらかに(あらゆる事を穏便に)、怨ずべきことをば(浮気の愚痴なら)見知れるさまに(気付いている位に)ほのめかし(牽制してみて)、恨むべからむふしをも(恨み言を言うときも)憎からず(愛想含みで)かすめなさば(遠回しに言えば)、それにつけて(そういう妻の様子に夫は)、あはれもまさりぬべし(愛着を強く持つものです)。多くは、わが心も(自分の浮気心も)見る人から(妻次第で)をさまりもすべし(収まりもするものです)。あまりむげに(かといって、あまり無頓着に)うちゆるべ(締まり無く)見放ちたるも(夫を放って置く妻も)、心安く(大様で)らうたき(健気な)やうなれど(ようでも)、おのづから(その内に)軽き方にぞ(かろきかたにぞ、大事ではない者にも)覚え侍る(おぼえはべる、見られるようになってしまう)かし(ものです)。繫がぬ舟の浮きたる(うきたる、岸を離れる)例も(ためしも、例えもあるように)、げに(実に)あやなし(簡単明瞭な事です)。さは(そうは)はべらぬか(思われませんか)」

と言へば(と左馬頭が言えば)、中将うなづく。

「さしあたりて(今が今)、をかしとも(愛しくも)あはれとも(慕わしくも)心に入らむ(思っている)人の(相手に)、頼もしげなき(浮気をしていそうな)疑ひあらむこそ(疑いが在れば、其れこそ)、大事なるべけれ(大変な事に為る訳だ)。わが心(自分の気持ちを)あやまちなくて(取り乱さずに)見過ぐさば(大目に見て遣り過ごして)、さし直しても(相手の気持ちを直しても)などか(みたりして)見ざらむと(見ようかと)おぼえたれど(思うものの)、それさしも(それすらも)あらじ(あぶない)。ともかくも、違ふべき(たごうべき、行き違う)ふしあらむを(時があっても)、のどやかに見(長い目で見て)忍ばむよりほかに(時を待つほかに)、ますこと(いい手は)あるまじかりけり(在りそうも無いようだ)」

と言ひて(と言って中将は)、わが妹の姫君は、この定めに適ひ給へり(かないたまえり、当てはまっている)と思へば、姫君の婿たる源氏の君の打ち眠りて(うちねぶりて、居眠りして、狸寝入りだが)言葉まぜたまはぬを(何も仰らないのを)、さうざうしく(物足りなく)心やましと(不満に)思ふ。馬頭(うまのかみ)、物定め博士になりて、ひひらきゐたり(さらに喋り立てた)。中将は、この事割り(ことわり、馬頭の物定めを)聞き果てむと(最後まで聞こうと)、心入れて(熱心に)、あへしらひ(応答)ゐたまへり(されていた)。

「よろづのことに(世の中の様々な物に)よそへて(引き比べて)思せ(おぼせ、考えてみて下さい)。木の道の匠(きのみちのたくみ、家具職人)の万の物(よろづのもの、雑多な物)を心にまかせて作り出だすも、臨時の遊び物(もてあそびもの、飾り物)の、その物と跡(あと、型)も定まらぬは、そばつき(見た目は)戯ればみ(ざればみ、風変わりな)たるも(ようでも)、げに(実に)かう

も(こうして)しつべかり(形作られて)けりと(来たのかと感心し)、時につけつつ(その時々)に
さまを変へて(趣向を変えて)、今めかしきに(今どき風のもの)に目移りて(目移りして)をかしき
もあり(面白い物もあります)。大事として(ただ大事な物として)、まことに(本当に)うるはしき
(端正な)人の調度(ひとのちょうど、必要な道具)の飾りとする、定まれるやう(決まった様式が)
ある物を難なく(立派に)し出づること(作り出す事が)なむ(出来る程の)、なほ(更なる)まことの
物の上手は(もののじょうず、名人は)、さま(様子の)ことに(違いが)見え分かれはべる(見分け
られるものなのです)。

また絵所(えどころ、宮中の絵画彩色管理所、画工司えたくみづかさ)に上手多かれど、**ある**
者は墨がき(すみがき、下絵書き、図版構成責任者の画家)に選ばれて、**他の者は次々に彩色を**
施していくがさらに(それで其々の)劣りまさる極目(けぢめ、を探しても)、ふと(はて)しも(さ
て)見え分かれず(見分けが付かない)。かかれど(そうした中で唐絵については)、人の見及ばぬ
蓬莱(ほうらい、仙人が住む山)の山、荒海の怒れる魚(うお)の姿、唐国のはげしき獣(けだもの)
の形、目に見えぬ鬼の顔などの、おどろおどろしく作りたる物は、心にまかせて一際(ひときは)
目驚かして、実(じつ)には似ざらめど(実際には似ていないかもしれないが)、さてありぬべし(そ
うであろうと感じさせられるものです)。

世の常の(また倭絵では常に目にする)山のたたずまひ、水の流れ、目に近き人の家(いえ)居
(ゐ)ありさま、げにと(実に成程と)見え(描いて見せて)、なつかしく和らいだる方(やはらいだ
るかた、穏やかな姿)などを静かに描きまぜて(かきまぜて、絵に配し入れて)、健よか(すくよか、
堅い陰しい)ならぬ(ものではない=なだらかに低く波なす)山の景色、木深く(こぶかく、森深く)
世離れて(よばなれて、人里遠く)畳み為し(たたみなし、幾重にも重ねて描き)、け近き(ごく身
近な)籬の内(まがきのうち、垣根の中の普通の家)をば(なら)、その心しらひ(こころしらい、細
部)おきて(骨組み)などをなむ(などをまで)、上手はいと勢ひ殊に(ことに、優れて描き)、悪ろ
者(わるもの)は及ばぬ所多かめる。

手を書きたるにも(字を書くにも)、深きことはなくて(素養なしに)、ここかしこの、点長(て
んなが、手慣れた様に点を続け書く)に走り書き、そこはかたなく気色ばめる(けしきばめる、達
筆風のもの)は、うち見るに(一寸見は)かどかどしく(勘の鋭い)気色だちたれど(才筆のよう
でも)、なほ(やはり)まことの筋を(正筆を)こまやかに(丁寧)に書き得たるは、うはべの筆消えて
見ゆれど(見掛けは地味でも)、今ひとたび(改めて)とり並べて見れば、なほ(やはり)実になむ(じ
つになむ、本物の方に)寄り経る(よりける、引き寄せられます)。

はかなきことだに(一寸した事でさえ)かくこそはべれ(こうした次第です)。まして人の心の、
時にあたりて(場当たりで)気色ばめらむ(格好つける)見る目の情けをば(見た目の風情などは)、
え頼むまじく(まるで当てに為らぬ物と)思うたまへ得てはべる(存じております)。その(ひとつ)
はじめのこと(初めて知った女のことを)、好き好きしくとも(好色めきますが)申しはべらむ(申
し上げましょう)」

とて(と言って左馬頭が)、近くみ寄れば(膝を進めて座を狭くしたので)、君も目覚まし給ふ(た
まう、なされる)。中将いみじく進じて(身を乗り出して)、頬杖(つらづゑ、ほおづえ)をつきて

向かひみたまへり(馬頭の話に聞き入った)。すると座がまるで法の師(のりのし、坊主)の世のことわり説き聞かせむ所の心地するも、かつは(それはそれで)をかしけれど(奇妙だったが)、かかるついでには(むしろ之の座にあつての実態は)、おのおの睦言も(むつごとも)え忍びとどめずなむありける(其々が暴露話を言わずには居られない心持ちになっていたことにありました)。